**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第２５回　（２０１６年　４月１２日）**

**・第２５回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」４頁**

・📖 （読む）**「師と弟子」**　４頁下段２１～５頁上段２

***「たぶん、アラーティをなさるところでございましょう。それでしたら失礼いたしましょうか」***

***シュリー・ラーマクリシュナ(まだ忘我の状態で)「いいえ―アラーティだって？　いや、はっきりとそう言えるようなものではない」***

(解説)

アラーティという翻訳が間違っていると前に言いましたね。サンディヤーはアラーティではありません、夕拝です。☞（第24回『福音』勉強会）

**＜バーヴァ＞**

**（１）バーヴァの意味は前後関係で変わる**

**①　忘我（エクスタシー）**

少し前の本文にバーヴァがありましたね。

*ときどき師が忘我の状態にお入りになるらしいことに気づいた。後に彼はこの気分がバーヴァ、法悦状態と呼ばれるものであることを知った*。　☞（『福音』4頁下段１２）

忘我の日本語の意味は何ですか？

T：「例えば、耳でなんとなく聞こえているけれども頭とか全然働かない、そんな感じだと思います」

それだったらオーケーです。この場合の**バーヴァは忘我、英語でエクスタシー**です。霊的なムード、霊的なある状態です。これはサマーディの状態ではない。神様の気づきがありますが、普通の意識もあります。「全部が神様の意識」と「全部が普通の意識」の真ん中がバーヴァです。

バーヴァ(忘我)はアルタバイヤダシャと同じ意味です。

バイヤダシャ、アルタバイヤダシャ、アンタルダシャの説明は前にしましたね。

☞（『福音』第4回テキストデータ）

・バイヤダシャの意味は、全部普通の意識がいっぱい。

・アンタルダシャは100%神の意識。

・アルタバイヤダシャのその真ん中の状態です。神の意識もありますが、普通の意識もあります。それがバーヴァです。

**②　態度**

バーヴァは前後関係でいろいろな意味が出ますね。

別のところでバーヴァは、例えば神様についての信者がとる態度(５つ)のことを言います。

①神様は私の主、言いかえれば、私は神様の召使いという態度

②神様は私の子という態度

③私の友という態度

④私の恋人という態度

⑤平安の態度

☞『福音』用語解説より　　　（『福音』ｐ４７ほか参照）

**（２）暗くなりあたりが静まると、バーヴァの状態になりやすい**

夕方になるとシュリー・ラーマクリシュナはいつもバーヴァの状態が出ていました。外がだんだん暗くなりますと、シュリー・ラーマクリシュナはもっともっと神の意識が深くなって、普通の意識はだんだん小さくなります。もっと夜になると、そのとき普通の意識はほとんどなくなっています。いつも夜は忘我の状態。真夜中はいつも忘我の状態に入っています。みなさんは寝ていますけれども、シュリー・ラーマクリシュナは忘我の状態に入っています。

シュリー・ラーマクリシュナと同じ場所に住んでいた人や直弟子はみなさん、シュリー・ラーマクリシュナはあまり寝なかったと言っています。一時間か最長でも一時間半くらい。他のときはいつも朝まで忘我（エクスタシー）かそれ以上の状態です。忘我の状態のときには、いつも神様の名前を唱えたり、賛歌を歌っていました。

どうして暗くなりますと、シュリー・ラーマクリシュナはその状態に入りますか？　昼間はふつうですが、夕方になりますと、もっともっと神様の意識が深くなっています。その原因は何ですか？

T：「夕方から夜にかけて、世俗的な活動がだんだんとおさまってくるから。波動が変わってくる」

なぜならひとつの説明は、夕方になるとだんだん自然も静かになります。自然を見てください。暗くなると本当に静か。そして人間も自然の一部分ではないですか？　街ではそうではありませんが、田舎では何も聞こえない。本当に静か。誰も外に出ない。

普通、人は朝から夕方まではラジャス的です。たとえばパワフルに仕事をします。しかし人間も自然の一部なので、夕方になると、パワフルに仕事をするというフィーリングがだんだん減りますね。　そして普通の人はみんなタマス的になります。

しかし霊的な人は、サットワ的になります。なぜならタマスがないですから。

シュリー・ラーマクリシュナは外が静かになると霊的になるだけではなく、すぐ神と一緒になります。

シュリー・ラーマクリシュナには朝から夕方までいろいろな仕事がありました。例えば、教える、人が来てあいさつをする、話をする。

例えば、シュリー・ラーマクリシュナが話をする時、心という感覚の一部分は外にあります。そうしないと話ができないですね。しかし話が終わるとすぐに中に入ります。それが忘我のひとつです。夕方にみんなが帰って静かになるとすぐにチェンジします。『福音』にその例がたくさんあります。

シュリー・ラーマクリシュナの場合、自然にその状態になります。

朝から夕方までは10％くらい意識が外にありますが、夜には100％、中です。

そしてシュリー・ラーマクリシュナはいつも忘我、忘我、忘我の状態。

しかし普通の人は自然にその状態にはならないので、皆さんの実践のために助言があります。

もし辺りが暗くなってきて自分の手の産毛が見えなくなると、全部仕事をやめて、神様のことを思い出し考えてください。

時計を見なくても、どれくらい暗くなったかそれでチェックが出来ますね。『福音』の中に何回もその例が出てきます。

シュリー・ラーマクリシュナは顔をお洗いになった。タバコが出された。彼はMにおっしゃった。「もう夕暮れか。それならタバコは吸うまい。夕闇のせまってくるころには、人は他のすべての行為をやめて神を思い出さなければならない」こういいながら、彼はご自分の腕の毛をじっとごらんになった。それを数えることができるかどうか見ようとお思いになったのだ。数えられなければ夕暮れだ、というわけである。

☞（『福音』577頁）

・📖 （読む）**「師と弟子」**　５頁上段３～５頁上段９

***少しばかり話をしたあとで、Mは師にあいさつをして別れを告げた。「またおいで」と師はおっしゃった。***

***家に帰る途中、Mは不思議に思った。「私をこんなにも惹きつける、この澄み渡った感じの人はいったい何ものなのだろうか。人は学者ではなくても偉大であることができるものだろうか。なんという驚くべきことだろう！　もう一度会いたい。彼も『またおいで』とおっしゃったではないか。あしたかあさってに行こう」***

**＜「また来てください」＞**

**（１）また来てほしい理由**

**①人間関係を深くする**

シュリー・ラーマクリシュナはお客様にいつもまた「来てください」と言っていました。

どうしてまた来てほしいのですか？

なぜなら、

**シュリ―・ラーマクリシュナの目的は人を導くことです。そのために人間関係を深く築きたいのです。**

一回会っただけではそれはできないですね。何回も来ることで人間関係が深くなります。人間関係が深くなると、シュリー・ラーマクリシュナの言うことをもっと自然に受け入れられます。

例えば、あなたが聖者、賢者に会いに行きます。聖者の言うことは霊的に高く、素晴らしいですが、あなたはそれのすべてに従おうとは思いませんよね。

**②信者の心の準備をする**

農夫が作物を植える時、まず最初に何をしますか？　土を耕しますね。土を耕さずに種を植えてもそこから芽は出ません。だから土を耕してから、あとで種を植えます。シュリー・ラーマクリシュナのやり方は、いつもそれです。**最初は心、心の土を準備します。**そうしないと、話をして助言をしても信者はすべてをわかりませんし、すべてに従いません。シュリー・ラーマクリシュナが信者の心の土を耕すのには、いろいろな方法がありました。そのひとつが「また来てください」です。何回も来て、人間関係が深くなると、シュリー・ラーマクリシュナを愛するようになります。愛しますと、**愛した人が言うことならもっと簡単に自然に従うことができます**。

みなさん、直弟子のことを考えてください。シュリー・ラーマクリシュナは彼らにいつも「また来てください」と言いました。そしてまた来てくださると、食べさせ、飲ませて面倒を見ました。そして信者はだんだんとシュリー・ラーマクリシュナのことが分かるようになり、とても愛するようになりました。それがベースです。そのベースを作ったあとで、シュリー・ラーマクリシュナは直弟子たちに助言をしました。どんなにたくさん助言をされても、人間関係が深くないと助言の印象が深くなりません。

わかりますか？

シュリー・ラーマクリシュナの体が亡くなったとき、ボラノゴル(ラーマクリシュナ僧院が最初にできたところ)で直弟子たちは議論をしました。

「シュリー・ラーマクリシュナは私を一番愛してくださいました」

「いいえ、私を一番愛してくださいました」と他の直弟子も言いました。

直弟子はみな自分が一番愛されていたと言いました。

もちろん、直弟子たちも最初からそのようには思っていたわけではないですね。何回もシュリー・ラーマクリシュナのところに行って、食べさせてもらったり飲ませてもらったりと、面倒をみてもらってからです。『福音』の中でもシュリー・ラーマクリシュナは手で食べさせていました。それは心の土を耕すためです、心の準備のためです。そうしますと、みんなシュリー・ラーマクリシュナから離れることができなくなります。人を愛しますと、その人のことが忘れられなくなりますね。忘れられないので、その人のインパクト、人格のインパクト、心のインパクトが自然に深くなります。

助言の印象を深くする。そのためにいつもシュリー・ラーマクリシュナのやり方は人間関係を作る。それが面白いです。

How to make the relationship deeper.

**③信者に霊的な波動を入れるため**

「また来てください」にはもう一つの理由があります。シュリー・ラーマクリシュナのところに来ると、神様の話がたくさんあります。神様の話はとても精妙です。世俗に住んでいるみなさんの世俗的な印象はとても深いです。その反対の霊的な波動を入れるのは一回会っただけではできないですね。そのために何回も会う必要がある。

そしてシュリー・ラーマクリシュナのもとでは、神様の話を聞くだけではなく、デモンストレーションがありましたね。霊的に最高のデモンストレーション、サマーディ。それも一回だけではなく、何回もありました。それでみなさん感動しましたね。聖者でもサマーディのデモンストレーションはできません。なぜならそれは最高の状態ですから。霊的な生活の最高がサマーディです。シュリー・ラーマクリシュナはそれが自然に出ています。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダジがシュリー・ラーマクリシュナの写真を撮った時もそうでしたね。普通の瞑想が始まる感じで自然にサマーディに入りました。

**（２）霊的な良いサムスカーラを持っている人だけが何度も来る**

「また来てください」とシュリー・ラーマクリシュナは皆さんに言いましたが、来るか来ないかはケース　バイ　ケースでした。なぜならサムスカーラがばらばらですから。全く来なくなった人もいれば、再訪はしたが、1年、2年、3年経ってから、来る人もいました。

しかしどうして、Mさんや、スワミジ、ブラフマーナンダジ、プレマーナンダジはすぐに来ましたか？

なぜなら彼らには霊的なサムスカーラがありましたから。

**＜何も見返りを求めず、ただ信者を幸せの道に導く＞**

「また来てください」とシュリー・ラーマクリシュナが言う目的はひとつだけ。

**みなさんを幸せの道に導くためです**。

**相手から見返りは何も求めません。**

ときどきある目的をもって信者の面倒をみるお坊さんがいます。お金持ちがくるといっぱい面倒をみる。なぜならあとでたくさん寄付金をもらえるから。自分が遊ぶためにお金が必要ですから、お金持ちの面倒をいっぱい見ます。その目的で信者の面倒を見ます。それは世俗的なことです。

直弟子のひとりのスワーミー・ニランジャナーナンダジの生涯にありますね。ニランジャンが二度目にドッキネッショルを訪問したときのことです。

師は入り口の近くにこの少年を認めるやいなやそばに走り寄り、彼を温かく抱擁された。それから、「私の息子よ、日は過ぎていくというのに、いつおまえは神を悟るのか。もし神を悟らなければおまえの一生は意味のないものになるのだよ。私は、おまえがいつ、全身全霊をこめて神に帰依するようになるかと思うと、心配でたまらない」と深い思いを込めておっしゃった。ニランジャンは驚きに口がきけなかった。そして思った。「実に不思議だ。私が神を悟っていないからといって、どうして彼はこんなに心配するのだろうか。この人はいったいどういう人なのだろう」ともかく、深い思いから発せられたこれらのことばは、少年の心を強くとらえた。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　☞（『真実の愛と勇気』152頁）

ニランジャンはとても驚きました。なぜならニランジャンからは見返りが何もないですね。にもかかわらず、シュリー・ラーマクリシュナは彼が悟るかどうかをとても心配しています。もしシュリー・ラーマクリシュナがニランジャンを愛していないなら、彼が悟っても悟らなくても構いませんでしょ。

その人が私をどれくらい愛しているか、そのことを思ってニランジャンは驚きました。シュリー・ラーマクリシュナはそこまで考えています。心配しています。

ずっとあとでシュリ―・ラーマクリシュナはニランジャンに聞きました。

「ニランジャン、あなたの私への愛は以前とどう違いますか？」

「前にも愛はありましたけれども、今はあなたから一秒も離れることができません」

とニランジャンは答えました。

**＜惹きつける＞**

**「また来たい」**とMさんは言っていまね。どうしてその考えが出たのでしょうか？

Mさんが特別なわけではありません。ちょっと良いサムスカーラをもっている霊的な人はみんな同じフィーリングが出ました。

なぜならそれは、**魂が魂を惹きつけるからです。**

**ある魂は別の魂を惹きつけます。クリシュナのフルートみたいです。**

シュリ―・クリシュナの名前のひとつの意味は、『惹きつける』です。

何を惹きつけますか？

信者の心を惹きつけます。そのシンボルがフルートです。シュリ―・クリシュナがフルートを吹くと、みんなそれを聞いて走ってクリシュナのもとに行きました。家族、旦那さん、息子、娘たちのことを忘れて、親戚の批判を恐れないで。親戚の批判、例えば旦那さんのお母さんや妹は批判するでしょ。そのことも気にせずに走って、夜に、森の中に、何も心配しないで行きます。

どうして？

なぜならしょうがない、**抵抗することができない**。

attraction of the soul by a super soul.

(至高の魂が我々の魂を惹きつける)

attraction of soul of the devotee by the reincarnation of the god.

（神の生まれ変わりが信者の魂を惹きつける）

super soul(至高の魂)とはシュリ―・クリシュナ、シュリ―・ラーマクリシュナです。

そしてMさんは考えました。「おお、また来たい！　再びここに戻りたい！」

その考えは初めは小さかったですが、あとでとてもとても深くなっていきます。惹きつけられてだんだんもっと深くなりました。

ニランジャンもMさんもシュリー・ラーマクリシュナに惹きつけられたのですね。一秒も離れることができない。

（『福音』勉強会第25回　以上）